

City University of Hong Kong 滞在記

鵜飼 正二

香港の City University of Hong Kong (香港城市大学, 以下 CityU と記す) に滞在して数ヶ月が過ぎた 2005 年の秋のある日, 大学のホームページ¹に「本学が世界トップ 200 大学ランキングで 178 位に」という記事が出ているに気が付いた。それによると英国の週刊新聞 The Times Higher Education Supplement (THES) が 2004 年から始めた大学の世界ランキング²で, 1 年前の 198 位から 20 位ランクアップしたということであった。今では日本でもこのようなランキングがかなり知られるようになったが, それまで世界大学ランキングなるものを見た事がなかったので興味が湧き, リンクを辿って THES のホームページからそのランク表をダウンロードして眺めてみた。それによると, 驚いたことに香港の大学が CityU の他に 3 校もランクされていた。欧米, 特に米国の大学が圧倒的に多く, また日本は 10 大学がランク入りしていたが, 香港の人口が 700 万弱であることを考えると, 人口比では香港が突出している。

さらに, 昨年秋には, 大学のホームページに, CityU が THES ランキングで 156 位にランクアップしたことが, さらに本年 2 月のホームページには, 中国の Shanghai Jiao Tong University (上海交通大学) が中国の大学のレベルアップの指標作りの一環として 2003 年から独自に始めた The Academic Ranking of World Universities (ARWU)³ に, 理工学系大学として CityU が 51 位にランクされたとの記事が掲載された。もちろんこのようなランキングには色々な議論があり, また, 選考基準についても様々な検討が加えられていることは THES や ARWU のホームページからも伺えるが, 1 つの指標として考えればやはりこれは大きな意味を持つ。

香港では 1990 年代に大学の研究・教育のレベルアップを目指して大規模な改革が行われた。その当時はまだこのような大学の世界ランキングは行われていなかったもので, 改革がこれらを直接意識したものではなかったであろうが, 結果として現在これらのランキングの上位に入っていることは, 比較的短期間に改革の

¹ <http://www.cityu.edu.hk/>

² <http://www.thes.co.uk/>

³ <http://ed.sjtu.edu.cn/ranking.htm>

成果を挙げたことを意味している。本稿ではこれらの改革の事情を含め、CityU や香港の大学の現状を紹介する。

現在、香港にはCityUを含め8つの大学がある。参考までにCityU以外の7大学を列挙しておく。

Hong Kong Baptist University (香港浸会大学 HKBU)

Lingnan University (嶺南大学 LU)

The Chinese University of Hong Kong (香港中文大学 CUHK)

The Hong Kong Polytechnic University (香港理工大学 PolyU)

The Hong Kong University of Science and Technology (香港科技大学 HKUST)

The University of Hong Kong (香港大学 HKU)

Honk Kong Sue Yan University (香港樹仁大学 HKSJU)

なおこの他に、教育大学 (The Hong Kong Institute of Education) と公開大学 (The Open University of Hong Kong) がある。

このうち THES ランキングに入っているのはCityUの外にHKU (33位), CUHK (50位), HKUST(68位) である (カッコ内は2006年のランク)。8大学のうち半数がランク入りしているのも驚きである。

これらの大学のうちHKUは1910年の創立で古い歴史を持っているが、それ以外の大学の設立は比較的最近で、CHKUは1962年、HKUSTは1991年であり、その他の大学はさらに新しく、CityU, HKBU, PolyUの3校が、それまでの単科大学 (College) から独立した大学 (self-accrediting university) に昇格したのは1994年で、またLUは1998年に昇格、HKSJUは昨年に発足したばかりの香港初の私立大学である。

この年譜からわかるように、香港政府は特に1990年代に高等教育の大規模な拡張政策を実行し、そのための大学予算を設備・研究費・人件費を含め大幅に増額した。そして、それに応じて、各大学は研究と教育の業績の飛躍的なレベルアップが要請された。この目的達成のため各大学では人材確保のため、外国人研究者を含む多数の研究者の募集を行ない、その結果、多くの海外在住の中国人研究者が香港に戻ってきた。たとえばCityUでは百人以上の海外在住、特に北米在住の研究者を採用した。彼らの殆どは海外に10年以上滞在しており、すでに研究者

として十分な経験と最先端の知識を身につけていた。このことが大学のレベルアップに大きく寄与した。CityUの各学科のホームページを見ると博士号を欧米で取得した教員が殆どである。

また、改革に際し、大学の研究活動の活性化するため、教員の研究・教育業績に関する厳しい審査制度が導入された。CityUではそれまで教育専門の工科単科大学（City Polytechnic of Hong Kong）であったが、大学昇格に際しこのような審査制度を取り入れたため、かなりの教員の入れ替わりがあったという。

香港の大学では業績評価が教員の新規採用、終身在職権（テニユア）、昇格、昇給のたびに行われるが、その審査基準の主な指標の1つとしていわゆるSCIジャーナルに掲載された論文数が使われている。教員の新規採用には過去3年間にSCI論文が3編以上などといった条件が付加される。CityUのある学科の掲示板にSCI上位20位の雑誌のリストが掲示されているのを見たことがある。また、学生にとってもSCIジャーナルは関心事で、CityUでは、博士課程入学には少なくともSCI論文1編、博士の学位取得には在学3年間に更にもう1編が要求される。これは日本に比べかなり高いハードルである。

香港の大学の大きな特徴の1つはその国際性であろう。CityUの授業はすべて英語で行われている。学内の公文書も英語である。セミナーの案内も例外でない。また、CityUの教員数はおよそ1600人であるが、THESのランキングを見ると教員が最も国際的に雇用されているのがCityUとなっている。中国出身で海外居住経験者が含まれているが、欧米人の教員も多い。また外国人研究者の訪問も多く、講演会はもとより共同研究や研究交流が盛んに行われている。この事情は他の大学でも同様である。

この国際化は先に述べた1990年代の改革の時期に採用した海外の優れた研究者が、その後香港に根を下ろしたことが大きい。上に述べた国際交流が盛んなのは、彼らが海外で築いた人間関係に拠るところが大きい。ところで、彼らがそれまでに海外で築いた環境を去って香港に定着した理由の1つは、香港の持つ国際的な色彩の文化によるところが大きいと思われる。もちろん待遇や研究費の優遇もあろうが、人材を長く引き止めるためにはそれだけでは不十分で、文化的な環境も重要であろう。特に英国統治時代から英語が公用語であったこともあり、欧米の教員にとっても住みやすい土地であるようである。また欧米の大学と単位互換の授

業が香港で行われている。このような国際性は学生にとっても魅力的で、卒業後直ちに国際的な繋がりが得られることは、香港内はもとより、海外から、特に中国本土から、多くの学生を惹きつける理由にもなっている。

最後に香港の教育事情を少し紹介する。香港の大学は中国と異なり3年制である。その分、中等教育（中・高一貫で中学校と呼ばれている）は7年制となっている。これは英国の制度そのままである。しかし、香港政府は2012年にすべての大学を4年制に、中学を6年制に移行する計画を進めている。その大きな理由はグローバルスタンダードに合すことにあるようであるが、大学関係者の話では、学生は大学入学試験のために1年余分に時間を使い、大学に必要な基礎知識が不足しているのも理由だとのことである。制度的には大きな改革で、大学では教員不足、中等教育では教員の過剰になる。大学院生の中には大きなチャンスと受け取る向きもいる。

現在の香港の中学からの大学進学率は約60%である。インターナショナルスクールの卒業生で海外の大学に行くものもかなりの数になるがこの数字には含まれていないそうである。この60%のうち1/3（15,000人）は香港政府から奨学金が給付され、2/3は私費学生である。その内訳は各大学により異なるが、全体として日本とかなり様子が違う。

香港の大学には準学士コース、学士コース、また大学院課程は修学コース（taught postgraduate, 修士のみ、修士論文は課さない）と研究コース（research postgraduate, 修士および博士）がある。準学士と学士は日本の短大と4年制大学に相当する。実際、上で香港の大学は8（10）校と紹介したが、このほかにかなりの数のカレッジ（community college）が存在する。また準学位コースを併設している大学も多い。また研究大学院を除きどのコースにもフルタイムコース（全日制）とパートタイムコース（定時制、夜間授業）が設けられている。これらの詳しい内訳は各大学のホームページに見られる。

CityUでいえば学生総数は大学院を含め2万5千人であるが、この大学の大きな特徴の1つはパートタイム学生の多さで全体の2/5を占る。また修学修士コースも5千人と多く、その殆どがパートタイムである。彼らは職業を持ち、キャリアアップを目指している。その意味で定時制本来の機能を果たしていることになる。

また準学位コースの学生も5千人と多い。こちらは殆どがフルタイムである。これらのことはCityUが地域社会への貢献に力を入れていることを表している。

CityUでは給付生1に対し私費学生1.5であるが、給付生の殆どはフルタイム学士コース学生と研究大学院生（全員、千名弱）である。一方、準学位コースの学生の8割とパートタイム学生の殆どが私費学生である。上に述べたことから修学修士コースの学生の殆どが私費学生ということになる。そのような条件であっても大学に入学したいという若者が多いということは、それだけ大学が魅力的だと考えられているからと言える。

CityUのキャンパスは全体が1つの大きな建物というユニークな構造であるが、その4階の広い大学コンコースには、よく手入れされたテーブル・椅子・ソファ・PCなどが多く置かれて、掃除も行き届いていて、集まりやすい構造でもあり、学生の格好のリフレッシュングスペースとして、いつも賑わっている。パートタイム学生が多いので夜遅くまで人が絶えず、また、土・日も多く集まっているのに感心する。

CityUの卒業は6月であるが、卒業式は11月にガウンと帽子着用で行われる。そればかりでなく、1年を通じて、ガウンを着て角帽を冠った卒業生が家族や友達と大学に来て記念撮影をしている姿を頻繁に見かける。卒業生は手にぬいぐるみを持つ習慣があるのが微笑ましい。1人の卒業生を囲み祖父母を含む家族全員が集まって記念撮影をしているのをよく見かけるが、香港では人々にとって大学がそれだけ魅力ある場所なのだと実感する。

本稿を書くにあたり周りの香港や中国の方々から色々な話を伺った。特に、副学長のRoderick Wong教授には貴重な時間を割いて頂いた。また数学教室のTong Yang教授からも多くのことを伺った。厚くお礼申し上げます。もちろん本稿の文責はすべて筆者にある。最後に私事で恐縮あるが、この場をお借りして、2年間のCityU滞在という貴重な機会を与えて頂いた両教授と数学教室の皆様に深く感謝いたします。

2007年4月18日 香港にて